

「55年のあゆみ」発刊にあたって

神戸商科大学グリークラブOB会

会長 西尾 昭

(学部6回 昭和29年度指揮者)

神戸商科大学グリークラブOB各位には、お仕事やご家庭に日々ご精励のこととお慶び申し上げます。

さて、本年で創部55年を迎えOBは500名を数えるまでになりましたが、ここ数年、現役は数名という最悪の状態が続き、活動も十分に行えない実情です。また、平成16年4月より兵庫県内の県立大学が併合されることになり、神戸商科大学の名称も消えることとなりました。誠に残念至極であります。県の大学教育計画の将来を見据えた改革だとすれば致し方ありません。

そこで、この機に当たり、徐々に忘れ去られつつあるわがグリークラブの半世紀に亘る歴史を書き記しておくべきではないかと判断し、「神戸商科大学グリークラブ55年のあゆみ」を編纂いたしました。

また、昭和31年頃はじめてOBの合唱活動は、長いトンネル時代を経て、「コール淡水・東京」「コール淡水・大阪」としてスタートし、今や立派な男声合唱団になりつつありますが、永年有志で続けられているゴルフ同好会「TGG会」と共にその活動について掲載いたしました。

OB諸兄には、今後益々お元気で交流や活動の輪がひろがり、充実した人生を歩まれるよう祈念いたします。長い間OB会のお世話を下さった加藤陽一郎(学6) 田中勇二郎(学7) 坂田達哉(学9) 高橋斉(学12) 岡本俊郎(学13)の各氏をはじめ、「コール淡水(東京・大阪)」のメンバー各位、そして今回の編纂に取り組みされた田中勇二郎(学7) 宇賀弘(学13)の各氏、並びにご協力下さった方々に対し心から厚く感謝申し上げます。

創部55周年の祝賀ご挨拶

グリークラブ顧問 小西 一彦

(神戸商科大学教授)

神戸商科大学グリークラブOBの皆様、お元気ですか。日頃は現役の活動を温かく見守って下さり有難うございます。また、コール淡水・大阪の皆様には、ここ数年、卒業式と入学式で大変お世話になり申し訳ございません。この場を借りて心からのお詫びと感謝を申し上げます。お陰様で現役もどうにか組織を維持することができましたし、大学も大事な行事をつつがなく挙行できました。顧問をしていますと、グリーはこの大学にとっては本当に大事な組織であるにつくづく痛感させられます。私が思いますに、大学とは、ただ単に目に見える建物や教室や教職員が重要なのではなく、本質でもありません。学生こそが大学の中心に位置づけられすべての教育の起点に据えられなければなりません。学生のニーズに応え徹底して支援する大学こそが真の大学です。現在、日本の大学は、存続が危うくなって、ようやくこの方向への変革を模索するようになってきました。本学も同様です。しかし、まだ、この変革の速度は遅いことと、加えて来年度からの県立3大学の統合という難題にも直面して、目下、産みの苦しみを味わわれているというのが実状です。前者はグリークラブへの新入生の結集の弱さという形で現れていることはご承知のとおりです。後者は特に大学名の変更が大きな問題としてあります。私たちとしては、来年4月に向けて、今はただ、全員が一丸となって取り組む以外には方法はありませんが、OBの皆様方におかれましては、かりに名前が変わっても歴史と伝統は続いていることをお認め頂き、温かくお見守り下さいませようお願い申し上げます。

さて、今年は、創部55周年ということで「神戸商科大学グリークラブ55年のあゆみ」を編纂されるとのこと、お祝い申し上げます。ここには私の知らない記事や写真なども沢山載るのでしょうか。何しろ55年といいますがと本学(昭和23年設置、全国最初の新制大学)と殆ど同じ年です。また、グリーのOB500余名というのも大部隊です。本学の卒業生の総数は約2万人と聞いていますからその約2.5%に当たります。相当なウェイトですね。これから、この「あゆみ」の持つ意味は大きく、多分、神戸商科大学の歴史全体の編纂誌になる可能性が考えられます。大学にとっての貴重な宝にもなるでしょう。期待しています。

先にも述べましたが、大学というのは決して目に見える建物だけではありません。むしろ教室の中こそ大学があります。また、キャンパスの中での学生間の語り合いの中こそ大学は存在するのです。さらにはキャンパスを越えて学外で、そして卒業された後の同窓会やその他の活動の中にも存在するのであります。その意味では皆様の大学は永遠になくならないのであります。戦前(神戸商大時代)の第1期から、戦後(神戸商大時代)の第2期、そして、来年から(兵庫県立大学時代)の第3期を含めて15年、55年、100年という長い「あゆみ」の中に今を位置づけて皆様の大学を皆様の手で育てていって頂ければ良いのではないかと考える次第です。結論は、グリーメンとしての活動と関係は続けて頂き、合わせて本学の第3ステージの歴史の開幕に対しても、現役に、そして本学に、変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、現役の皆さまも含めて、全グリーの皆様に、改めて、これまでの長年の文化活動、大学と地域活性化への大きな貢献に敬意を表しますとともに、今後のますますのご活躍とご発展をお祈り申し上げ、神戸商科大学グリークラブ創部55周年へのお祝いの言葉に代えさせていただきます。

55周年おめでとう

元・グリークラブ顧問 渡部浩太郎

(神戸商科大学名誉教授)

クラブ結成55周年おめでとうございます。前任の山本先生から引き継いで三木先生にバトンタッチするまで何年になりますか、クラブの顧問を勤めました。合唱の指導をするわけでもなく、部員諸君が優等生揃いなので面倒に巻き込まれることもなく、平穩無事な毎日でしたが、数多くの青年と交流を深めることが出来たのは本当に幸せだったと思います。

普段の練習やクラブ活動には殆どタッチしませんが、合宿や演奏会には真面目に参加して、出席率は100パーセントに近いのではないかと密かに自負しております。合宿での感想は「合唱の練習がこれほどきついとは思わなかった」です。

グリーメンが燦然と輝くのは、なんといっても定期演奏会でしょう。ユニホームに身を固めた出演者たちがライトの中に浮かび上がる瞬間は何時見ても身体が痺れるような感動に包まれます。一部、二部とステージを重ね、「遥かな友(だったかな?)」で幕が降りて、ロビーでの談笑、反省会の賑やかな雰囲気、教室での彼等とは別人のような凛々しい姿に、密かに尊敬の念さえ抱いたものでした。その諸兄も、今は社会のリーダーや中堅として活躍し、家庭では良きパパやおじいちゃんになっておられるでしょう。今後のご健康をお祈りします。

「商大グリーと私」

元・グリークラブ技術顧問 田村 嘉崇

(武庫川女子大学教授)

私が商大グリーの演奏を初めて聴いたのは42年程前の大学生の時でした。大学の先輩(佐野由利江さん)の伴奏で「スカンクカンク ブー」という曲を演奏されていたのをしっかり記憶しています。その後、

県の合唱祭で時々演奏を聴き、独特の雰囲気のあるユニークな合唱団だと感じていました。卒業後高校音楽教師として赴任したのがお隣の県立星陵高校でしたので、17年間グリーの練習の声を時々耳にしています。後に長田高校、県立教育研修所と職場が変わって遠ざかっていたのですが、1984年の春、35回生の田中正裕氏が正指揮者の時、現県合唱連盟会長の洲脇光一先生にお声をかけて頂いて練習に参加させて頂くようになりました。

60人程のとても元気でしっかりした取り組みのグリーだったことが印象に残っています。それから15年間技術顧問として一緒にさせていただいたのですが、学生指揮者やメンバーの力量によって各一年間が楽しかったり苦しかったり本当に様々でした。発声トレーニングを中心に体力だけは学生に負けないと取り組んでいましたが、私自身のために練習をさせて頂いたように思います。今もって年賀状を下さる方があり本当に感謝しています。現在私は姫路パルナソス合唱団の常任指揮者として7回生の福原正浩氏の下で頑張っています。「継続は力なり」をやっと実感できるようになりました。混声合唱もいいものです。よければ歌いに来て下さい。

グリークラブの歩み

(昭和43年・第16回定期演奏会プログラムより抜粋)

元・グリークラブ名誉顧問
故・山本英一名誉教授

私が初めて定期演奏会を聴きに行ったのは、昭和29年の第2回の時である。欽松ホールという小じんまりとした会場であった。西尾君(旧姓・矢野君)が張り切って指揮をしていたが、なにしろ初めての経験でまだ良く分からなかった。華やかな雰囲気とステージの大輪の花が印象に残っている。商大グリーの揺籃期であり、私にとっても前史であった。

昭和30年の第3回演奏会から海員会館に進出した。グリーが歴史時代に入った時期で、タクトも西尾君から福原君に移り、大塩君に受け継がれた。皆がロシア民謡に熱情を傾けた時期で、福原君の繊細な指揮、美しい奈良君のバスと田中君のテノールなど、皆良く息が合って情感に満ちたハーモニーを醸していた。第3回公演のフィナーレ「赤いサラファン」は田中君のテノールが会場一杯に流れて、コーラスの美しさ、愉しさをはじめ私に開眼してくれた。また、グノーの「アヴェマリア」での大塩君の力強いテノールソロも忘れがたい。

昭和33年頃には部員も50名近くなり、商大グリーの本格的な基礎を作り上げた香川君の格調ある内面的な宗教曲、殊に黒人霊歌への沈潜、佐藤君の繊細で熱情的な日本民謡、桂川君の美しいテノールはまるで宗教改革とルネッサンスが一緒にやってきたようなもので、商大グリーの近世の幕開けであった。

昭和36年の第9回演奏会はその成熟を示したものである。片山君の合唱組曲「山に祈る」は2階の正面で眼を熱くしながら聴き入った。升田君の日本民謡への沈潜は「日本の古い唄」にユニークな味を出し、佐藤君の「月光とピエロ」の迫力は商大グリーの水準の高さを示すものであった。

昭和37年の第10回演奏会あたりから定着した伝統の上に指揮者がそれぞれの持ち味を出し、百花繚乱の現代にさしかかっている。第10回の升田君指揮の組曲「蛙の歌」は詩と音楽の見事な結晶、第11回の若城君の交声曲「若者の歌」の詩情、第12回の奥田君の組曲「みどりの狂人」の熱っぽくて妖しいばかりの美しい官能の世界、第13回の占部君の組曲「北陸にて」は暗くて淋しい北陸路の四季の生活と風光をしみじみと歌ってくれ、第14回の加藤君の組曲「薔薇の散策」では繊細で壊れやすいバラの花の色と香りが漂うばかりであった。なかでも圧巻は、占部君の指揮した第13回の鎮魂曲「眠れ幼き魂」と第15回の加藤君の組曲「山に祈る」の見事な再演である。爆撃で亡くなった少女の魂のさすらいを歌った「眠れ幼き魂」はナレーターの児童劇団の登喜代ちゃん的好演と相まって、深い感動を会場一杯に引き起こし、戦争の悲惨さと戦争への憤りが私の心を揺り動かした。